

地域と学校の文化・スポーツ活動

文化・スポーツ活動を位置づけ・継続させることにむけて

桑原 清

はじめに

本分科会における報告は、全体で四本であった。①合唱、②絵本、③講談、④分科会の歴史、についてである。分科会では、各報告者・参加者が、いわば面白味を感じ、趣味として、地域ならびに学校という場で、活動を行い、仲間づくりをする中で、個人的のみならず集団的な成長を遂げるといふことが共通に了解されているように考えられる。

今年の四つの報告は、ここ二、三年の議論をそれぞれのアプローチから深めるものとなったと思う。①合唱団活動では、ただ単に合唱が好きというだけではなく、社会的な問題と緊張関係を持ちながら、人々を励ましてきた活動であることが明らかになった。②学校における「絵本」を子

どもたちに親しんでもらうために、教師自身が楽しんで「絵本さがし」を行っていることが、まさに文化活動の原点であることを暗黙裡に明示していた。③教員から講談師になると決意し、実際に踏み出し、文化の真つ只中にいる立場から、世の中にある社会通念、人々のこだわりに対して、相対的な自由度を持つて距離を置くことができることを示したものである。④本分科会の歴史を調べる中で、研究テーマと内容の推移が歴史的関連性を持ちながら経過してきていること、それが今後の分科会の方向といかなる関連性を持つようになるか期待を抱かせるものとなっている。

いずれも文化を考える際に貴重な提言となつていくが、共通していることは、文化は、①現場からわき起こつてくるものである、②人々を励ますものとなつていく、③歴史的・社会的状況と密接に関係している、④経済（金銭）感覚とバランスをとりながら発達するものである、ということである。

一 各実報告の概要

1 北海道歌唱団創立六〇年の歴史と教訓と課題

北海道歌唱団 増子 捷二

戦後日本の文化運動（特に音楽）の高揚は、戦前からの文化運動の伝統、さまざまな外国の文化の輸入、帰還者が持ち帰ったものが全国の地域、炭鉱等での公演されたこと、文化運動の組織化の提唱と青年共産同盟の活動等の様々な要因がある。

全国的なうたごえ運動の高まりの中で、一九四九年八月、札幌で「青共北海道合唱団」が結成され、これをもって「北海道合唱団」成立としている。北海道合唱団は、創立以来、「うたごえは平和の力」を合言葉にし、平和と命、暮らしを守る闘いを支援し、国民の希望、願いを歌に託して活動を続けてきた。国内だけではなく、世界青年学生平和友好祭への参加、中国、ソビエト、インドネシア、ベトナム等を訪問し、国際連帯運動にも積極的に参加してきた。

北海道のうたごえについては、一九五〇年代は炭鉱、国鉄が中心であったが、その後多くの階層に広がり、一九六〇年代には学園や職場のサークルが多く生まれ運動の輪が

大きく広がった。各地のうたごえ運動の集約点として全国各地で「うたごえ祭典」が開催され、北海道でも一九五五年に開催され、以後毎年開かれている。一九六六年に「北海道のうたごえ協議会」が結成され、うたごえ祭典や全道を網羅した音楽講習会や各種の学習会、創作合宿等が継続して開催され、北海道全体の結集と音楽的力量の向上に大きな役割を果たしている。

課題と今後を展望については、以下の三点に凝縮できると考えられる。①個人の趣味や思いつきではなく、運動として続いていくためには、基本的に三つの点が必要となる。 (a)共通の理念・理論や絶え間ない運動の総括と方針、 (b)運動を進める媒体（運動の進め手）、 (c)支えてくれる人々、社会的基盤。うたごえ運動として、初期の「開拓精神」的な意気込みや、運動の成果から学んで実践していくという姿勢は基本的に受け継がれているが、時代とともに薄れていっていることも事実である。

②うたごえ運動はその時々々の社会状況を最も敏感に反応するものでもある。さまざまな情報や価値観が多様化している中で、これまでも増して常に社会状況の変化を敏感に感じ取る姿勢と、音楽的力量の一層の前進が求められている。

③北海道（札幌）における民主的な文化・芸術運動の発

展を考える時、各団体・協議会の横のつながりが非常に弱いと思われる。多忙化と高齢化を等により、横開き（ライプ）にまで目向ける余裕がないというのが現状であるところが、その点での現状の分析、方策等を考え実践していく場が必要であろう。

2 「地域と学校の文化・スポーツ活動」

分科会の軌跡―穴だらけのレポート・序章―

道南落語倶楽部 荒井 到

本報告は、「地域と学校の文化・スポーツ活動」分科会の歴史を探ることにより、分科会の今後のあり方・態様を明確化したいという、荒井さんの意欲作である。

報告が依拠した資料は、『北海道の教育』（分裂開催前は六七・六九・七〇・七五年開催分）である。開催場所も現行とは異なり、各地が開催地となっていた。本第一八分科会の前身は、「青少年文化はどうあるべきか」であるらしい。

一九六七年合研は、分散会が持たれ、①視聴覚教育関係、②文化創造活動関係（演劇その他）、③図書館（読書教育）関係に分かれて話し合われた。一九六九年合研では、「講師」が「共同研究者」となり、理由については、「講師」として集会のみのものという性格になってしまふ。それを乗り越えて日常的な実践と共同研究を推進するためにブロック

毎に編成することにした。」目指す方向については、「労働組合運動の発展の中で教研活動を固く結合させ、共同研究者の役割と任務を明確にし、姿勢を確立すること、国民教育を創造する担い手として権力と対決し、人民とともに教育を創造し、発展させる。」となっている。

一九七〇年合研「地域・学校の文化をどうあるべきか」分科会では、共同研究者は基調報告の中で、『北海道の教育第四集』を果たして読んでいるのか。昨年度までの成果と課題を踏まえていないものがある。…という。編集者は、「こうしたきびしいたたかいが、教師集団の質を高め、文化活動をニセモノからホンモノにするのだ。」とまとめている。共同研究者と実践者との効果的なかかわりが構築されていないことが伝わってくる。一九七五年合研「地域・学校の文化をどうすすめるか」分科会では、「…戦列を離れていった諸氏がある。かえりみて講師団というこのルーズな組織体は教研二〇年の歴史でさまざまの問題をはらんでいた。各界各専門分野から動員された講師団の意思統一ということには口に云うほどやさしいものではなかった。教研四半世紀の歴史過程で、講師団問題も、吟味検討を加えるべき重点眼目の一つであろう。」という記述があり、共同研究者と実践者のかかわりが問題としてあげられている。「釧路第一高校問題」をめぐる運動の評価の相違を経過

し、合研集会在、分裂集会となつていった。共同研究者の鈴木喜三夫氏は、「今回の教研集会は残念ながら二つに分かれてしまった」ものの「学校や学級という社会へ閉じこもる方向」か「自分たちの現状を何よりも大切にしよう、そしてそこから地域へどう広げ、そして再び現場へ何をもちぞすか」であると方向性について論評した。

その後は、『一九七七年 北海道の教育』の「地域・学校の文化活動」分科会報告で、本山節弥氏は、文化とは「イソシメルモノ」であり、「心をこめてつとめはげめるもので」、「イソシム中で無形のもの欲得ぬぎのもの」と定義し直している。また、「オシエテヤロウ劇で世の中が変わるなどと思いがつてはいけない」と述べ、「上から目線」に批判を加えている。

一九七九年の合研から分科会の名称が、「地域と学校の文化・スポーツ活動」になった。理由は以下の通りである。

①身体文化―人間の身体を形づくったり、その健康いっそう増進したりするために創出された身体運動を、美しさを追求する絵画や音楽等と当時のジャンルとしてとらえる。

②運動文化―身体活動中核としてそれに付随するルール、組織、マナー、練習法及び独自の人間形成機能などを含むものと考え、しかも夫々が独自のできてい発展過程を持つものと考えておく。〔『北海道の教育 一九八〇年版』）

くして、スポーツも文化の一員として分科会討議の仲間となったのである。

3 ぜび、子どもたちに読んでほしい「絵本」

全渡島教職員組合(茅部支部)

森町立さわら小学校 渡辺 孝久

今年度、初めて文化の一員として仕事をする中で、図書の管理・購入をすることが多くなった。現在の小学生にとって、一生涯に残る本、実践に影響を与える本というものが果たしてどのくらいあるのだろうかと考えることがあつた。たくさんありすぎて「自分にとつての大切な本」を見つけない状況にあるのではと考え、度々書店に足を運び、可能な範囲で買い揃えてみた。

子どもたちの「読書離れが進んでいる」と言われて久しいが、確かに道南の書店に行くと、そこに置かれている絵本を見るとその少なさを痛感してしまう。しかしながら、札幌市の行きつけの書店では、いつ行っても絵本、児童書コーナーに子どもたちがあふれている。みんな手に手にお気に入りの絵本や図鑑を持ち、ここにこしながら、あるいは真剣な表情で読みふけているのである。三〇人くらいの子どもたちで読んでいても、まだまだスペースに余裕があるフロアと陳列されている図書の数の多さには驚かされ

る。子どもたちは条件さえ与えられれば本を読むのではないだろうかと思えてならない。「読まなくなってきた」のではなく「読めなくなってきた」のではないか。

その一員として、①大人（社会）が、子どもたちに対して読書しやすい環境を創り出していない、②大人が、あまり本を読まなくなってきた（大人の活字離れ）、③子どもたちを取り巻く娯楽文化の多様化がどんどん進んでいる、④大人が、子どもたちに対して自らの読書体験を語っていない、などが挙げられると考える。

休み時間になると子どもたちは、図書コーナーなどでよく読書や語らいをしている。子どもに対して「この本を読んでみたら」というようなことは言わないようにしている。その代わりに、「子どもたちに読んでもらいたいなあ」と思う本をその子の近くで読むようにしている。そうすると、「先生、何を読んでいるの?」「その本、貸して」とたいていは声をかけられる。あくまで子どもたちの自発性を大切に「この本、なんだろう?」「ちよつとだけ読んでみようかな?」という「きつかけ作り」の役に徹している。

今注目している本は、安房直子さんの作品で、『きつねの窓』『鳥』などが教科書にも出てくるが、それ以外の作品も大変美しく、情感豊かな作品が多い。いったん読み始めると途中でストップできなくなる魅力があり、何か音楽

を感じさせる情景が展開し、読み終わった後には独特の安堵感が得られる。ストーリーの展開の中で、かげりを感じさせる表現や、人間の持つ複雑な感情が多彩に描かれていて、特に小学校中々高学年の児童に読んでもらいたいと考えている。

4 中途退職者のぼやき―教員から講釈師へ―

道南落語倶楽部 荒井 到

昨年度に参加・報告してくれた奥井則行氏による奥井理君の一生に関する報告が心打たれるものであり、「文化とは生き様そのものだ」ということから、荒井さんの報告は始まった。精神的・肉体的に健康を害してまで教員を続けるよりは「講釈師」に転身した方がと思つて踏み出した。荒井さんは、中高時代の勉学生活の話、大学時代、企業への就職・退職、そして教員免許状一種取得のための大学院通い、それを経ての高校教員としての勤務、そこでの生徒や教員との関わり、そして退職という事情を詳しく話された。道東の高校での生徒の退学という状況に「ああ、辞めるという手もあるのだな」と教えられた。体調も良くないこともあり、教員を辞め、函館の家族の下に帰つた。

高校の非常勤や家庭教師を行いながら、講釈師として生計を営んで今に至つている。仕事の数は、新聞に取り上げ

られてから増えてきた。講談の種類としてはその場にあわせて選ぶが、オリジナルを用意することもある。古典も演ずるが頻度としては自作が圧倒的に多い。経済的なことも含めて、私には荒井さんの報告をこれ以上書くことができなかつた。

二 報告・討議から学んだこと

1 文化の質が問われている

今年度はすべての報告において、それぞれの分野のアプローチの違いはあるものの、共通していることは人々ととって個々人の生にとつてかけがえのない喜び、生きがいはあるはずだということ、それが文化ではないかということであった。そうしたことは、北海道合唱団の活動の歴史が示してきたように、個人ではなく集団としての人々の喜び、それを大切にし、それを阻害するものに対しては敢然と闘いを挑んでゆく、こうした社会的感性がかつてはあつたように思える。今、それが無くなつていくというのではないが、そうしたものが弱体化し、価値観の多様化というスクリーンの上で見えにくくなつていくことも現実である。増子さんの報告は見事にそのことを射抜いている。

音楽やダンスなどの最近の状況について、多くの若者がそれらに何故惹かれるかを考えてみた時に、文化というのがよく見えてくるのではないかと思う。やはり、①かっこよさ、②テクニク、③協同性がその基礎にあると感じる。生きていく上で、何かに夢中になつてみたい、自分の可能性を発現してみたいという生の欲求がそこにはある。モラトリアム期が長期にわたり、人生における競争も激しさを増している今、何か夢中になれるものがなければ生きてはいけないことを感覚的に理解しているのではないだろうか。

しかしながら、開始し始めた活動を行いながら、同時に社会的な視点と出会わなければ「刹那的」で一過性のものとして活動が続かない可能性は多く残っている。昔と比べて、時間の流れが速く動いている状況にあつて、一人一人を文化的価値に出会わせ、それと対話し深めていく自己了解の機会を保障することの意義はますます高まつている。

2 学校教育での出会いの大切さ

学校教育の図書館活動で、多くの子どもたちが絵本や本という文化的価値に触れている。「押しつけ」的ではなく、「上から目線」でもなく、「寄り添う」目線が重要であるということは、小学校教員である渡辺さんが示唆を与えて

くれている。渡辺さんは、「読まなくなってきた」のではなく、「読めなくなってきた」と分析している。大人や学校がそうした機会を子どもに与えていないということになる。

荒井さんは、高校での「勉強」の問題性はひとまず置くとして、高校に至るまでに読書に親しんだ経験があるかどうかによって、高校の「勉強」への取り組みに差があることを感じるということを報告の中で述べた。自己肯定感、自己信頼感を厳しい状況のなかで獲得するためにも、文化的価値に触れることの意味と意義は大きいと考える。

図書館活動を行う際に、基本的に押さえておきたいことは、教師自身が「あるべき論」ではなく、本当に「絵本」や「本」が好きであることである。渡辺さんの実践の様子を聞いていると、まさに「先生」が好きな本を持って子どもに傍にいるから子どもが興味や関心を持って近づいてきてくれるということがよく伝わってくる。休み時間の他にも、国語の授業での「アニメーション」も含めて、楽しい読書・図書館活動の可能性も予感させてくれる。学級通信や教科通信などを通じての家庭とのキャッチボールも楽しいこととして全国的には実践されている。学校教育の可能性についても、再認識させてくれた討議でもあった。

3 個人的なものとしての文化をどう見るか

文化は、個人的で集团的・社会的なものであると先に述べた。荒井さんの講師師として生きることにかわつての報告は、端から見ると、内容のすさまじさや厳しさにもかかわらず、「文化」としての云々ということが全く出てこない、緩さを包摂したものを感じた。観客としての個人が興味次第で足を運ぶか運ばないかという世界での話が一面、さらにそれを超えた「新聞」掲載ということを経ての新たな人たちとの交流の拡大がもう一面である。荒井さんが意識されているか否やはわからないが、経済原理と文化論とのバランス調整の世界にプロとして参入されたのだと思う。この分科会で数年来の課題でもある「売れること」と「文化」との関係を身をもって体現されていると思う。今後の荒井さんには注目する価値があると考えべきなのではないだろうか。

また、「文化」云々というよりも、生活するというなかで、その場その場で決定してきたことは、すべての人に共通することであると思われる。そのぎりぎりの決定の際に、支えとなるものは、家族でもあり、友人でもあり、趣味・文化でもありうる。その支えの意味を吟味し、深めていくことも文化の仕事でもあるのだからと報告と討議から感じた

のである。

4 分科会としての今後の課題

「文化とは何か」ということが、課題になることは言うまでもないが、荒井さんの報告（分科会の軌跡）で紹介された事柄は今後より正確に検討される必要があると思われる。①本山さんの文化論の再検討、②分科会の運営等をめぐるあり方、が課題として提起されていると思う。②の分科会の財産が継承されていない、されるような取り組みをどうすべきか、については、全体にもかわる問題でもあるので実行委員会でも検討されるべきだと考えている。私見になるが、研究会のような形態でのある程度厳密な活動は、今のところは考えられないので、その分野のプロを分科会の各分野のメンバーとして揃え、まずはその中で共通理解を広げていくことが重要だと考え手いる。さらに、発表者の全員についてかつてのように分科会の報告・討議を踏まえたレポートを要求するのではなく、まずは実践を報告してもらい、そこに出席しているメンバー（よく分科会の事情を知っている者）が、検討の視点として分科会の蓄積・財産を的確に紹介することが必要に思える。

そうした意味では、荒井さんが開始した分科会の軌跡・歴史を全面的に検討することが急がれていると考える。